

富美文庫蔵「ふしみときは」について

塩 出 貴美子

はじめに

一 概要

本稿で紹介する富美文庫蔵「ふしみときは」は、上下二冊からなる絵入りの写本である（以下、富美文庫本と称する）。内容は、平治の乱の後、源義朝の愛妾常盤御前が今若、乙若、牛若の三兄弟を連れて都落ちする途次、伏見の老夫婦のもとに逗留するというもので、これは舞の本のうちの一つである。舞の本というのは、室町時代後期から江戸時代初期にかけて流行した幸若舞の語り台本を読み物用に転用したものである。慶長年間には古活字版が、また寛永年間には製版本が刊行されており、その後も版行が繰り返されていることから、かなり広く普及したと思われる。また、舞の本は絵巻や「奈良絵本」と通称される絵入本の題材にもなっており、多数の作例が伝存する。「ふしみときは」についても既に十数件の存在が確認されているが、富美文庫本はその新たな一例となるものである。本稿では、この富美文庫本の概要を紹介し、本文を翻刻するとともに、その特質について若干の考察を加えることにしたい。なお、富美文庫が所蔵する絵入本及び絵巻については、別に報告書を作成するので、そちらも併せて参照されたい（注1）。

(一) 書誌

富美文庫本は横本の奈良絵本であり、その書誌は左記の通りである。

〔形態〕 冊子 二冊

〔装丁〕 袋綴 四目綴

〔法量〕 各 縦十六・七センチ 横二十五・〇センチ

〔表紙〕 紺紙（空刷りによる文様あり）

〔外題〕 上冊「ふしみときは上」 下冊「ふしみときは下」

〔見返〕 白紙

〔内題〕 なし

〔料紙〕 各 十九丁

〔奥書〕 なし

〔付属品〕 帙、「奈良絵本・繪巻物即賣展」の案内書

装丁を袋綴の四目綴とするのは、横本の奈良絵本では通例のことである。法量も横本の標準的な数値の範囲内である。表紙は無地の紺紙であるが、台紙に裏面から空刷りの文様を施した紙を使用しているので、その文様が紺紙の表面

に浮き出ている(図1・2・23)。空刷りの版木は上下冊の表裏面とも同一のものと思われるが、紺紙の表面がかなり傷んでいるため、現状では文様が見え難くなっている部分が多い。文様は一辺約一センチの二重亀甲文を全面に配したもので、亀甲の中に五弁花を表している。また、下方には鱗に覆われた胴体のようなものがあり、竜を表したものと思われるが、その全容は確認できない。

上下冊とも表紙の中央に白無地の題箋があり、「ふしみときは上」「ふしみときは下」の外題が記されている(図1・2)。ただし「上」「下」の二文字は明らかに筆致が異なっており、後からの書き入れである。また「上」の上に「一」、「下」の上に「二」と重ね書きされており、「一」には朱も加えられている。見返しには本文の料紙と同じものが白紙のまま貼られている。内題及び奥書は当初からない。

料紙は上下冊とも十九丁で、装飾は施されていない。本文は第一丁表から十三行取で記されるが(図4)、例外的に十二行(下冊二丁裏)、十四行(下冊九丁裏)となる場所がある。また、挿図の前頁及び各冊の最終頁で行数が少なくなる場合は、散らし書きされることが多い(図5)。挿図は上冊に八図、下冊に六図、合計十四図(図9・22)あり、いずれも半丁で完結する。本文とは異なる料紙に描かれており、半丁分の本文の料紙と前小口で貼り合わされるが、その際、本文の料紙の端を数ミリほど折り返して糊代としている。

付属品は帙と「奈良繪本・繪巻物即賣展」の案内書の二点である。帙は紺無地の布張で、表の左上に「伏見常盤奈良繪本 二冊」と記した白無地の題箋が貼付されている。この帙は明らかに近年の作であり、次に述べる即売展への出品に際して作られた可能性も考えられる。「奈良繪本・繪巻物即賣展」の案内書は、B5サイズ一枚物で両面に印刷が施されている。これは「十月二十五日より三十一日迄(二十七日定休日)」の間、「上野松坂屋古書部」を会場として開催された即売展の案内であり、「奈良繪本繪巻物特集」と題して「一、奈良

繪本 源氏物語」から「三四、漫畫地獄草紙 耳鳥齋筆」まで三十四件の作品が掲載されている。裏面の末尾に丸括弧付きで「弘文荘出品」と記されていることから、これらは全て東京の古書肆、弘文荘のものであったことがわかる。この三十四件のうちの二十八番目に「伏見常盤」があり、そこには次のように記されている。

二八、伏見常盤 明曆寛文頃写 二冊 六、五〇〇円

絵様が古風で、文章も亦古朴(流布本と異同が多い)、愛すべき冊子である。や、大型の横本、挿絵十四面。

富美文庫本がこれを購入したものであることは明らかであるが、残念ながら案内書には年が記載されていない。そこで『弘文荘待買古書目：for Windows』(注2)で検索したところ、一九五一年六月刊行の『弘文荘待買古書目』二十号(以下『古書目』20と称する)に「伏見常盤」の二冊本が掲載されているのが検出された。そこには次のように記されている。

五一五伏見常盤 明曆萬治頃寫 二冊 五、〇〇〇圓
奈良繪本

同じく舞の本、や、大型の横本十三行。挿繪上巻八枚

下巻六枚。繪様古拙、愛玩に値す。文章も古朴、流布

本と異同多し。

「同じく」とあるのは、この前に「五〇九幸若舞之本卅六番」以下、版本、写本、絵入本の本が列挙されているからである。ちなみに、この後にも舞の本の絵入本「大職冠」と「濱出草紙」が続く。

さて、右の記載内容を先の案内書と比較すると、やや大型の横本であること、挿絵が合計十四面あること、文章は古朴で流布本と異同が多いことなどがすべて一致している。絵様についての「古拙」と「古朴」、また「愛玩に値す」と「愛すべき冊子である」も同義と見てよい。制作年代の下限については、万治(一六五八―一六六二)と寛文(一六六一―一七三)の相違があるが、これは許容範

冊内であろう。さらに「古書目」20の方には、本文が「十三行」と明記されていることなどを考えあわせると、両者が同一の作品であることは明らかであろう。ただし値段は、一九五一年六月の時点では「五千圓」であるのに対し、案内書では三割増の「六、五〇〇圓」になっている（注3）。したがって、この即売展が開催されたのは一九五一年以降のことと思われるが、この当時の松坂屋上野店の定休日 は月曜日であることから（注4）、それは十月二十七日が月曜日の年、すなわち一九五二年であったと推測される。ところで、富美文庫所蔵の絵入本及び絵巻には、これ以外にも弘文荘の手を経たものが十件あり、さらにそのうちの六件については、一九五一年から五年の間に購入されたことがわかっている（注5）。「ふしみときは」の購入も、これらと一連のものであったと考えれば、右の推測は妥当なものであろう。

（二）調査結果

平成十九年度に行った富美文庫所蔵の絵入本及び絵巻の調査では、四目綴の作品六件については、修理をかねてということで一旦綴じ糸を外し、その間に調査及び撮影を実施した。これにより料紙全面の撮影が可能になり、また、通常の綴じた状態では知り得ない情報を幾つか得ることができた。そのうち「二十四孝」については既に報告したが（注6）、ここでは「ふしみときは」について明らかにしたことを三点だけ述べることにする。

第一点は綴じ穴についてである。四目綴用の穴は文字通り四箇所に開けられているが、本文の料紙を見ると、その一つ目と二つ目、三つ目と四つ目の間に、それらよりも背側に寄せて、約一・八センチ間隔で二つ一組の穴が開けられている（図4・5・9・22）。「二十四孝」の報告でも述べたが、これは表紙を付けるまでの下綴じの跡である。ただし「二十四孝」では、この穴は本文の料紙にだけあり、上下冊とも表紙、裏表紙及びそれらの見返しには開けられていな

かった。ところが「ふしみときは」では、表紙及び裏表紙にないのは同様であるが、見返しについては、下冊の表紙見返しを除く三面に下綴じ用の穴が開けられている（図3・6・7・8）。図3の上冊表紙見返しと図4の同1丁表（本文冒頭）、また図5の同19丁裏（本文末尾）と図6の同裏表紙見返しを見比べれば、同じ綴じ穴であることは明白である。つまり、この三面では、一旦下綴じされた紙がそのまま見返しに貼られているのである。ちなみに富美文庫所蔵の他の四目綴の作品四件十一冊を見たところ、それらはすべて「二十四孝」と同様の状態であった。また、それらの作品は見返しを金箔押しとする点でも「二十四孝」と同様であった。右のことから、見返しに下綴じ用の穴があるのは、富美文庫の所蔵品の中では「ふしみときは」だけであり、それは見返しに本文の料紙と同じ紙を用いていることと関係するもののように思われる。

第二点は、表紙についてである。表紙は薄い紺紙を厚めの台紙に貼り、その四周を裏側に折り返して作られる。これについても「二十四孝」で述べたが、「ふしみときは」の見返しは白無地なので、その下に表紙の折り返し部分が透けて見える（図3・6・7・8）。これを見ると、上下の小口では約二センチ、前小口では約三センチ、そして背側は綴じ穴にからないように約五ミリほどが折り返されているのがわかる。なお、下冊裏表紙は見返しの右下隅が破損しているため、その様子を直接見ることができない（図8）。また「二十四孝」では、見返しも上下と前小口では端を裏側に折り返していたが、「ふしみときは」では折り返さないまま表紙に貼付している。これも本文と同じ料紙を使ったための相違であろう。なお、表紙と見返しの糊付けが剥がれた箇所からは、台紙に押された空刷りの凹凸を覗き見ることができたが、竜の全容はやはり確認できなかつた。

第三点は挿図についてである。最大の関心は綴じ代の部分はどうなっているかであるが、「二十四孝」と同じく、十四面すべてにおいて紙の端まで完全に

彩色が施されていた(図9-22)。また、挿図の料紙は本文料紙と前小口で貼り合わされているが、その裏面を見ると、挿図のうちの何枚かについては前小口以外の三辺にも糊跡のようなものが残っていた。しかし、本文料紙の側には糊跡は認められないので、これが何を意味するのかわからない。

二 本文

(一)「ふしみときは」の諸本

富美文庫本の本文については、本稿末に全文の翻刻を掲載し、後述する藤園堂本と校合した。これについて述べる前に、ここで、これまでに紹介されている「ふしみときは」の諸本のうち、絵を伴う作品を一覧しておくことにしたい。まず「室町期物語二」所収の田中文雅氏による「ふしみときは解説」には、次の十件が挙げられている(注7)。

- ① 松会版「ふしみときは」二冊 国会図書館蔵(松会本)
- ② 寛永製版「ふしみときは」一冊 国会図書館蔵(寛永本)
- ③ 「ふしみときは」一巻 サントリー美術館蔵(サントリー本)
- ④ 三十六番舞絵巻のうち「伏見ときは」一巻 チェスタービーティー図書館蔵(CBL本)
- ⑤ 「伏見ときは」一冊 藤園堂蔵(藤園堂本)
- ⑥ 「常盤の草紙」二冊 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵(岩瀬文庫本)
- ⑦ 「ふしみときは」二冊 蓬左文庫蔵(蓬左文庫本)
- ⑧ 「ふしみときは」二冊 天理図書館蔵(天理本)
- ⑨ 「ふしみときは」二冊 大東急記念文庫蔵(大東急本)
- ⑩ 「ふしみときは」二冊 逸翁美術館蔵(逸翁本)

①②は版本、③④は絵巻、⑤⑩は奈良絵本である(以下、丸数字及び括弧

内の略称を用いる)。このうち②寛永本は『舞の本 新日本古典文学大系59』(注8)に、③サントリー本、⑤藤園堂本、⑩逸翁美術館本の三件は先述の『室町期物語二』に、それぞれ本文の翻刻及び全挿図の白黒写真が掲載されている。また、⑥岩瀬文庫本は『伝承文学研究』第十五号に本文の翻刻及び挿図十五図のうち五図が白黒写真で掲載されている(注9)。⑨大東急本は影印本が刊行されている(注10)。

次に、小林健二氏が作成した「舞曲の絵入一覧稿」では、さらに次の七件が追加されている(注11)。なお、ここでは題名は省略されている。⑪⑬は版本、⑭⑯は奈良絵本(⑭は絵巻に改装)である。

- ⑪ 古活字版 早稲田大学演劇博物館蔵
 - ⑫ 古活字丹緑版 天理図書館蔵
 - ⑬ 寛永丹緑版 黒船館蔵
 - ⑭ 絵本大本改装絵巻 一巻 大阪市立美術館蔵
 - ⑮ 絵本大本 一冊(前後一部欠の零本) 東京国立博物館蔵
 - ⑯ 絵本大本 一冊(挿絵十九図) 東京古典会平成8
 - ⑰ 絵本横本の挿絵断簡 九図 臨川書店日本書古書目録79
- 以上をまとめると、これまでに確認された絵入りの「ふしみときは」は、版本五件、絵巻二件、奈良絵本十件(⑭を含む)であり、合計十七件になる。

(二) 富美文庫本と諸本の関係

右に挙げた十七件のうち、筆者が実見したのは②寛永本のみである。①松会本は国会図書館の、④CBL本及び⑦蓬左文庫本は国文学研究資料館のマイクロフィルムを、また③サントリー本、⑤藤園堂本、⑥岩瀬文庫本、⑨大東急本及び⑩逸翁本は右で挙げた公刊本を見たに留まり、⑧天理本及び⑪⑬は未見である。したがって、富美文庫本と諸本の間を論じるには甚だ不十分な段階

であるが、ここでは、本文についてこれまでにわかったことを一点だけ指摘しておくことにしたい。それは①～⑩の諸本のなかでは、富美文庫本と最も近い関係にあるのは⑤藤園堂本であるということである。両者の類縁性は、本稿末の校合結果を見れば明らかであろう。勿論、字句の細かな異同は多数あるが、それらは他の九件に比すれば大同小異と言える範囲内である。まず、その点を確認してみよう。

①～⑩の本文については、田中文雄氏が「ふしみときは解説」のなかで詳しく考証されている。そこでは、幸若舞曲の正本とされる毛利家蔵「舞の本」(以下、毛利家本と称する)を加え、十一件の「ふしみときは」が比較検討されているが、富美文庫本との関係で注目したいのは次の三点の指摘である(注12)。

- 1 これら十件のなかでは、⑤藤園堂本、③サントリ一本、⑩逸翁本の三件が「極めて異質な本文」を伝えている。
- 2 その特質は「要約的表記」と「省筆」である。
- 3 「こうした省筆化が最も進んだもの」が⑤藤園堂本であり、③サントリ一本、⑩逸翁本がこれに次ぐ。

つまり、毛利家本を加えた十一件のなかでは、⑤藤園堂本の本文が最も簡略化されているというのである。田中氏は「特に長文に渉る相違の見られる箇所を十二箇所」(注13)取り上げているが、それを見ると⑤藤園堂本のみ脱文が極めて多いのがわかる。例えば「三 落ち行くときはの条」では、毛利家本の「いつくへも ひとまつ おちゆかはとおほしめすか」及び「紅の二つきぬ。ひきまわしの帯はかり。御身は十二重に」の部分、また「四 とどろきの御坊の条」では、同じく毛利家本の「それきうちやうは 松に離れて色見えず」以下の部分が欠落している(注14)。同様の例は枚挙に暇なく、右の指摘が正しいことが理解されるが、その大部分において、富美文庫本は⑤藤園堂本に一致する。また⑤藤園堂本のみ異文、例えば「九 賤が庵のときはの条」の

「らしいうはかこらうやかんとの給ひしか」以下の部分、さらに⑤藤園堂本のみに見られる本文、例えば「一 女くらべの条」の「七とうへちよくしをたて」、「八 庵の門の間答の条」の「なにほとのことのあるへきそ」、「一〇 下女達ときは訪ふの条」の「いつものことなれば てかくるこおけに」などについても、富美文庫本はやはり⑤藤園堂本に一致する(注15)。以上のことから、毛利家本及び①から⑩の諸本のなかでは、⑤藤園堂本が富美文庫本に最も近いものであると断言することができる。

しかし、富美文庫本と⑤藤園堂本の間にも多くの異同があるのは事実である。次は、その点を見てみよう。両本を校合した結果、二四一箇所異同が検出されたが、そのうちの約半数は、中世以降に多く見られる仮名表記のゆれである。特に「は」と「わ」、「い」と「ひ」、「い」と「ゐ」、「お」と「へ」と「ゑ」、「う」と「ふ」などのゆれが多く、富美文庫本が正しい場合もあれば、⑤藤園堂本が正しい場合もある。前者の例としては「こはた」と「こわた」(上六二ほか)、「むかひ」と「むかい」(上七一ほか)、「うる」と「うい」(上八二一)、「をんな」と「おんな」(上八二七ほか)、「ちゑ」と「ちへ」(上九五ほか)などが挙げられる(富美文庫本、⑤藤園堂本の順に表記、上六二は上冊第六段異同番号2の略、以下同)。また後者の例としては「まい」と「まひ」(上一四ほか)、「くはん」と「くわん」(上一一五)、「をとわか」と「おとわか」(上六八ほか)、「らう」と「らふ」(上八四ほか)、「いゑ」と「いへ」(上八八ほか)などが挙げられる。また、わずかではあるが、終止形と連体形を誤用するなど、動詞の活用に関する異同も見られる(上一一六ほか)。残る半数は、主として写し誤りと思われる字句の異同や脱字、及び衍字などであるが、その大部分は一文字から数文字の些細なものである。ただし、やや長いものが七箇所あるので、次はそれを詳しく見てみよう。

まず、上八七は「とくらゐあらそひ」以下の文を、また下五三は「あたりの

ともたちか」以下の文を⑤藤園堂本が欠く例である。ところが、①～⑩の諸本のうち⑤藤園堂本を除く九件には、富美文庫本と近似する内容が記されている(注16)。したがって、この二例は⑤藤園堂本の遺漏と思われる。また、下五54も「きおんしやうしやにむめのみや」を⑤藤園堂本が欠く例であるが、これは③サントリー本でも同様に欠けている(注17)。次に上六12では、富美文庫本の「申まひ」が、⑤藤園堂本では「申まし、つたちはめたい共申まし」という意味不明の文になっている。他の諸本は富美文庫本に近い表現であるので、これは⑤藤園堂本の誤記であろう(注18)。一方、残る上六6、上七3、下五42の三例は、逆に⑤藤園堂本にある本文、すなわち「つめたや、おみたい」「と、さもかうしやうにのたまへは」「一人ははりま、ひとりはいつも」を富美文庫本が欠く例である。しかし、他の諸本には⑤藤園堂本に類似した内容が記されているので、これらは富美文庫本の遺漏と思われる(注19)。

ところで、富美文庫本及び①から⑩の諸本(⑧天理本を除く)のなかで、右のように富美文庫本のみが、あるいは⑤藤園堂本のみが異なるという例は、語句のなかにも散見する。例えば上八19の「つほめかさ」、下四8の「ふつてん」は富美文庫本のみに見られる語句であり、他の諸本では「いちめかさ」及び「ふつせん」となっている(傍線部が異同部分)。文意からすれば、これは富美文庫本の誤写であろう。また、上三3の「御山」を「この寺」とすること、上五1の「し」の欠落、上六9の「かつらかは」の欠落などは、⑤藤園堂本のみに見られる異同であり、少なくとも後の二例は⑤藤園堂本の遺漏である。最後に上二12及び上二13の異同を見ておきたい。富美文庫本の「うへみぬわし」とは意味が不明であるが、⑤藤園堂本は「うへみぬにしも」となっており、これなら意味が通じる。富美文庫本が「に(尔)」を「わ(王)」に、「も(毛)」を「と(止)」に写し誤ったものと推測されるが、この表現は他本にはないのであり、これも両本の類縁性を示唆する一例となる(注20)。

さて、以上のことから、富美文庫本の本文については、①から⑩の諸本の中では⑤藤園堂本と最も強い類縁性を持つことが明らかである。しかし、両者は各々独自の異同を有しており、そのなかには明らかに誤写と思われるものも含まれている。したがって、この両者間に、富美文庫本から⑤藤園堂本へ、あるいは逆に⑤藤園堂本から富美文庫本へという一方通行的な転写関係を想定することはできないと考えられる。

三 挿 図

(一) 場面内容

富美文庫本の挿図は、上冊に八図、下冊に六図、計十四図あり、いずれも半丁で完結する(順に絵1～絵14とする、図9～22)。まず、その場面内容を概観しておこう。なお、①～⑩の諸本の挿図については、田中文雅氏が「ふしみときは解説」のなかで比較検討し、どの場面が描かれているかを一覧表に作成している(注21)。その表には「1. 女くらべ」以下二十五項目が立てられているが、一項目中に複数の場面を含むものがあるので、場面の総数は三十六になる。以下では、田中氏の一覧表から富美文庫本に対応する場面を選び、その番号及び場面説明の字句を一行目に鈎括弧付で示しておくことにする(注22)。

〔絵1〕(図9)「3. 義朝ときはを賜る」

清涼殿とおぼしき建物で、義朝が御門から常盤を賜る場面である。本文には「みかと、ときはのまいの御たもとに御てをかけさせ給ひ、たんつのいし、あまおちのきはにてたまはりけり」とあるが、画面では御門は御簾の内に立ち、常盤は御簾の外、縁に立っている。常盤の向かって左に一人、右に二人、それぞれ公卿が座しており、義朝は階下で蹲踞する。

〔絵2〕(図10・24)「5・2. 落ち行くときは親子(山里)」

常盤親子が人家の前に行く場面である。本文には「いまわか、をとわかさきにたて、二さいのうしわかをは御ふところをし入」とあるが、画面では乙若が常盤の前に立ち、今若は右に立っている。牛若は常盤の左襟に、まるでこけしを挿したかのように描かれている。常盤が被る笠は先が三角に尖っており、三角帽に広い鍔を付けたような形である。この牛若と笠の独特の表現は、他の諸本の中では⑥岩瀬文庫本だけに見られるものである。また、常盤親子が立つ地面も、画面右下の人家や樹木も雪で白く覆われているが、本文は「五てうあたりのくろつちを、はしめてふむそあはれなる」と述べるだけで、雪には言及していない。しかし画面では、この白雪が豊かな情趣性を添えている。

〔絵3〕(図11)「6-1. 清水詣 寺の景、滝」「6-2. 清水詣 仏前、格子の前の親子」

常盤親子が清水寺に参詣する場面である。画面左に本堂を配し、外陣に常盤親子、懸崖造の舞台に三人の参詣人を描く。画面右には音羽の滝を描く。本文には「まへのこうしにつや申」とあるが、画面に格子はなく、内陣と外陣の境には御簾が下ろされている。なお、⑤藤園堂本及び⑥岩瀬文庫本では、6-1と6-2はそれぞれ別の画面に描かれている。

〔絵4〕(図12)「7. とどろきの御坊とときは親子」

常盤親子が轟の御坊を訪ねる場面である。僧坊の中に轟の御坊と常盤親子を描き、戸外に水景を描く。岸边が白いは雪を表したものであろう。

〔絵5〕(図13)「8. 一、二の橋の上のときは親子」

常盤親子が法性寺の橋を渡る場面である。本文には「三人のわかのをひき」とあるが、画面では乙若、今若、そして牛若を懐に抱く常盤の順に橋を渡っており、手は繋いでいない。画面右下には法性寺の堂舎と樹木を描く。絵2と同じく雪が積もっているが、本文はやはり雪には言及していない。

〔絵6〕(図14)「9. 雪の木幡山、木幡の里」

常盤親子が雪の木幡山を越える場面である。画面中央に丸味のある山を描き、その陰から現れるように常盤親子を描く。山は遠景のように表されており、それに比して大きすぎる人物を組合わせた構成は独特のものである。本文の「こはたの山はゆきそふる」の通りに山は雪で覆われており、白と緑青及び群青の対比が美しい。なお、本文に「ゆき」の語が出てくるのはこれがはじめてである。画面右上隅は、群青を塗って空とし、そこに白い月を浮かべるが、それを取り囲むような雲の表現はここだけに見られる珍しいものである。

〔絵7〕(図15)「10-1. 庵の門 立姿の親子、(応対のうば)」

「しつかふせや」に辿り着いた常盤が、一夜の宿を所望する場面である。門口に立つ常盤親子と、戸を開けて外を窺う姥を描く。本文には「とをほそめにあげ」とあるが、画面ではかなり広く開けられている。

〔絵8〕(図16・25)「10-2. 庵の門 座す親子、小袖、笠」

常盤親子が家の陰で夜を明かす場面である。地面に座し、袖を顔に当てる常盤、その前に座る今若、横に臥す乙若を描く。牛若は袖の陰に隠れて見えない。常盤の左側に、乙若を庇うように笠をたてているのは、本文の「つほめかさをそはたて、風ふくかたのかきとして、かんふうをふせき給ひけり」に忠実な表現である。しかし、下に敷いているのは黄色地に赤と緑の文様の入ったものであり、「御こそてをぬきてさつとき」とは齟齬する表現である。ちなみに常盤の衣装にも変化は生じていない。なお、建物については、絵7との整合性は全く考慮されていない。

〔絵9〕(図17)「12-1ときは親子、障子越しに窺うおうち、うば」

常盤の素性を不審に思った老爺が、和歌を詠みかける場面である。奥の部屋に常盤親子を、手前の部屋に老爺と姥を描く。今若と乙若は横になって眠っている。この絵以降、室内に障屏画が描かれるが、これについては後述する。

〔絵10〕(図18)「12-2庵の内 ときは親子、対面するおうち、うば」

常盤親子が老爺の許に逗留している場面である。常盤は部屋の奥に座し、乙若はその前に座っている。その右手で今若が牛若と遊んでやっている。なお、牛若の全身が描かれるのはこの場面だけである。老爺と姥は縁に近いところにおり、少し離れて対座する。老爺の前には茶臼と茶壺が置かれており、常盤をもてなしている様子が窺えるが、これは本文にはないものである。画面右下には、唐突に遠山が描かれるが、これは木幡山を暗示するものと思われる。

〔絵11〕(図19)「14-2. 庵での対面、ときは親子、五人の下女、おうち、うば」

常盤が五人の下女達に対面する場面である。奥の部屋に常盤、今若、乙若を、手前の部屋に老爺、牛若を抱く姥、五人の下女達を描く。手前の部屋の中央には桶が二つ置かれているが、これは下女達が持参した「さけの入たるおけ」であり、傍には野菜も置かれている。画面下方には、絵10(図18)と同じく木幡山を示す遠山が描かれるが、屋外の描写を伴う絵10の場合とは異なり、室内を描くだけのこの場面では異様に感じられる。この遠山は絵13・14(図21・22)にも描かれる。このような表現は③サントリー本、⑤藤園堂本及び⑥岩瀬文庫本に類似したものが見られるが、特に⑥岩瀬文庫本の第十五図と近いように思われる。

〔絵12〕(図20・26)「15-1. 在五の物語 ひさげを胸に伏す女、窺う中将」

常盤が語る話の中で、女が持仏堂に籠もり、水を入れた提子で胸を冷やすところを、中将が庭から窺う場面である。画面左に持仏堂を配し、香炉を供えた壇の前で、女が琴を枕に横臥し、右手で抱えるようにして提子を胸に当てているところを描く。提子は、本文には「しろきひさげ」とあるが、画面では金地である。琴は本文の「夜すから、ことをひきそはめ」に対応するものである。

画面右手は庭であり、松の木の根元に弓矢を帯びた中将を描く。これは「伊勢物語」第二十三段の「河内越」に基づく図様である。

〔絵13〕(図21)「18. 下女達の舞姿I(採物、扇)」

下女の一人が舞う場面である。この段で舞うのは出雲国の女と播磨国の女であるが、画面からはどちらであるかを判断できない。奥の部屋に常盤、今若、乙若を、手前の部屋に老爺、牛若を抱く姥、五人の女を描く。舞う女は右手に扇を翳しているが、これは本文にはないものである。画面下方には、絵11と同じく遠山が描かれている。

〔絵14〕(図22)「21. 遠江国の女の舞 舞姿IV(採物、ふりたる笠)」

遠江国の女が「ふるびたるかさのところがくやふれたるをきつとひきそはめ」て舞う場面である。人物の配置は絵13(図21)に近似する。舞う女が持つ笠はかなり尖った形であり、鍔は付いていないが、絵2・8(図10・16)の常盤の笠の三角帽の部分の思わせる。本文には「たもとよりたすきをとりて、さつとかけ」とあるが、襷はかけていない。画面下方には、絵11・13(図19・21)と同じく遠山を描く。なお、絵11・13・14は同じ部屋での出来事であるが、建物の構造や室礼の整合性は完全に無視されている。また五人の女は衣服によって同一性を識別できるが、姥も含めて座る位置は絵によって動いている。しかし、これらの不統一性は、この当時の絵巻や絵本ではむしろ通例のことである。

(二) 特質

富美文庫本の挿図の場面内容は以上の通りである。いずれも田中氏が作成した場面一覧表に対応するものであるが、絵3(図11)は他本が二図で表す内容を一図に合成している点が特異である(注23)。諸本との関係については現段階では言及を控えるが、これまでに確認することのできた範囲で言うならば、富美文庫本に最も親近性があるのは⑥岩瀬文庫本であると思われる。⑥岩瀬文庫本の挿図については、十五図のうち、富美文庫本の絵1・3・7・14(図9・11・15・22)に対応する五図を小さな白黒図版で見たにすぎないが、そのう

ち絵2に対応するものを除く四図については、建物、人物ともに構図に強い類似性が認められる。また、絵2で指摘した牛若と笠の表現、同じく絵11で指摘した遠山の表現も、この両者の類似性を示唆する。これは両者がともに横本の奈良絵本であることと強く関係するかと思われるが、一方で、同じく横本の奈良絵本である⑦蓬左文庫本との間には、これほどの類似性は認められない。この点については、富美文庫本と⑥岩瀬文庫本が初期の奈良絵本であるのに対し、⑦蓬左文庫本は後期のものであり、図様がかなり簡略化されているためと考えるべきである。

ところで、田中氏は①～⑩の諸本の挿図を大きく二グループに分けている(注24)。一つは版本系絵入本(①松会本、②寛永本、④CBL本、⑦蓬左文庫本、⑧天理本)であり、これらは「単に挿絵の数における近似に留まらず、絵画の基本的構図や、絵画化の基本的姿勢(絵画によるストーリーの読み取り)において強い類似性を持つ」とする。もう一つは③サントリー本、⑤藤園堂本、⑥岩瀬文庫本、⑩逸翁本のグループであり、その「類似性」は「挿絵の数の多さのみならず、挿絵化する場面自体の類似によっても容易に指摘し得る」とする。さらに後者については、③サントリー本と⑤藤園堂本は「明らかに同系統の絵」であるとし、岩瀬文庫本は「全体的には版本系諸本と、藤園堂本との中間態」であるとする(注25)。なお、残る⑨大東急本については「きわめて特異な位置にある」として、二グループから分離する(注26)。そして、以上の結果は「本文詞章の検討から得られた系統図」をほぼ支持するものであると述べている(注27)。

ところが、これまでの考察では、富美文庫本は本文においては⑤藤園堂本と極めて強い類似性を有するが、挿図においては、それよりもむしろ⑥岩瀬文庫本の方に親近性があると考えられる。とはいうものの田中氏が版本系絵入本と称した諸本よりは、⑤藤園堂本及びこれに近似する③サントリー本の方に近い

と言えるが、それでも⑥岩瀬文庫本との親近性には及ばない。したがって、富美文庫本は本文と挿図でそれぞれ異なる系統のものを取り入れている可能性があり、その点でも興味深い作品である。

次に、富美文庫本の絵画表現について、気づいたことをいくつか述べておきたい。まず、霞と雲の表現を見てみよう。画面の上下には水色の霞がかけられるが、その形は完全にパターン化している(図9～22)。すなわち一段目は水平に引き、その左右の端に寄せて二段目のすやり霞を引くもので、奈良絵本に最もよく見られる形である。輪郭は白線で二重あるいは三重に引かれている。なお、絵9(図17)の画面左下では、すやり霞がもう一段加わり、三段になっている。絵3(図11)の音羽の滝にかかる霞と絵6(図14)の山の下方にかかる霞は例外的であるが、これは風景に遠近感を与えようとしたものである。また絵6(図14)及び絵7(図15)において、画面上方に霞を描いていないのは遠山に霞をかけたくなかったからであろう。絵6では、先にも述べたが、画面右上隅に霞と同じ水色で雲を表し、その向こうを夜空とする表現が珍しい。

一方、金箔あるいは銀箔による雲もある。十四図のうち八図に用いられているが、これも奈良絵本にはよく見られる手法である。大半は水色の霞に添うように配されているが、絵6(図14)では山の中腹に単独でかけられている。これは画面左下の霞と同じく、風景に遠近感を与えようとするものである。また絵7(図15)では、画面上方の霞がないからであろうが、やはり霞から遊離した雲がある。なお、この雲は家の向こう側に配置されているが、このように描かれた事物よりも奥に位置づけられている雲はこれのみであり、その点でも注目される。

人物表現については、常盤は引目鉤鼻を基調とした上品な顔立ちで描かれているが、義朝や老爺、姥たちの顔はより人間的な表情で描かれている。概していえば、土佐派が描く伝統的な倭絵とは異なり、素朴で簡略な表現である。し

かし、弘文荘の即売展案内書の通り「愛すべき冊子」であり、穏やかな情趣性を湛えた作品であると言える。なお、簡略な表現という点では、絵6(図14)の遠山に添えられた樹木や絵12(図20)の松も同様である。前者は薄い墨線で表した幹に緑青を軽く掃いただけであり、後者は異様に屈曲した幹にほぼ同形の葉叢を並べただけである。

最後に、画中画を見ておきたい。十四図のうち七図に画中画が描かれているが、その大半は金地あるいは銀地に緑青で竹か草を描いたものである。絵4(図12)と絵12(図20)には金地に竹の襖があり、絵14(図22)には銀地に竹の襖がある。また絵9・11・13(図17・19・21)では、常盤の背後に金地に竹の屏風がたてかけられているが、襖は金銀地に草を描いたものである。金地に草を描いた襖は絵12(図20)と絵14(図22)にも見られる。一方、白地に群青の文様を施した襖もあり、これは絵10(図18)と絵12(図20)に見られる。奈良絵本の画中画は大凡三種類に分類され、このように金地に彩色を施したものの、白地に群青の文様を散らしたもののほか、水墨画を描いたものが散見する。ここでは、そのうちの二種類が混在しているのが注目される。

さて、富美文庫本の挿図については、このほかにも検討すべきことが多々あるが、本稿では以上を指摘するに留め、それらについては、諸本の調査とともに今後の検討課題としたい。

結 語

本稿では、富美文庫蔵「ふしみときは」の概要を紹介し、その本文を翻刻した。本文は、管見の限りでは、⑤藤園堂本と最も近いものであるが、相互の異同状況を検討した結果からは、この両者間に一方から一方へという転写関係を想定することはできない。しかし、⑤藤園堂本は諸本のなかでも特異な性格を

有するものであり、これと同系統の富美文庫本の存在は、今後の舞の本「ふしみときは」研究にとっても有益なものとなるであろう。

また、十四図ある挿図については、その場面内容を読み取り、田中文雅氏作成の場面一覧表と対応させた。現段階では、図様の点で最も親近性があるのは⑥岩瀬文庫本であるように思われるが、諸本との関係については今後の検討課題としたい。また、絵画表現についてもいくつか気づいたことを述べたが、奈良絵本については調査を始めたばかりであり、今後さらに多くの作品を見聞してから改めて論じることにはしたい。

注

(1) 塩出貴美子・中部義隆・宮崎もも「江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究」新出コレクションの調査を中心として(平成十九・二十年科学費基盤研究(C)成果報告書)二〇〇九年三月刊行予定。

(2) 弘文荘編「弘文荘待買古書目: for Windows」(CD-ROM版) 八木書店、一九八八年。

(3) 先述の「古書目」20掲載の「五一六大戦冠」は、その記載内容から、案内書の十六番目に掲載されている「奈良絵本大戦冠 寛永寛文頃写、大形本 一冊」と同一作品であると思われる。その値段は「古書目」20では八千五百円であるが、案内書では一万二千円に値上がりしている。

(4) 松坂屋上野店に、昭和二十年代の定休日について問い合わせたところ、第二次世界大戦直後については不明であるが、昭和二十五、六年頃以降は月曜日であったとの御回答をいただいた。

(5) 注1掲載書、塩出論文参照。

(6) 塩出貴美子「個人蔵『二十四孝』について」『総合研究所所報』第十七号、二〇〇九年三月。

(7) 美濃部重克・田中文雅編「室町期物語二」(伝承文学資料集第12輯)三弥井書店、一九八五年、二〇六一―二〇一頁。

(8) 麻原美子・北原保雄校注「舞の本 新日本古典文学大系59」岩波書店、一九九四年。

(9) 田中文雅翻刻・解題「資料 西尾市立図書館(岩瀬文庫)藏『常盤の草紙』」『伝承文学研究』十五号、一九七三年十一月。

(10) 島津忠夫編「大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 第二巻 物語草子I」所収、財団法人大東急記念文庫、二〇〇四年。

(11) 小林健二「中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―」三弥井書店、二〇〇一年、五五七―五五八頁。

(12) 注6掲載書、二六〇―二六二頁。

(13) 注6掲載書、二二六―二二七頁。

(14) 注6掲載書、二二二頁、二二五頁、二二七頁。

(15) 注6掲載書、二二九頁、二一八頁、二二七頁、二四四頁。ただし「九 賤が庵のとき かの条」の文頭の「らい」は、富美文庫本では「よひ」になっている(下冊第一段異同番号1参照)。文脈からは「よひ」が正しいと思われるので、これは⑤藤園堂本が「ら(良)」と「よ(手)」を写し誤ったものと推測される。

(16) この二例は田中氏が挙げた十二例のうちの「七 木幡山のおうちとうばの条」及び「一一」ときはの身の上話の条の一部にあたる。諸本で微妙に相違する箇所もあるが、大凡は富美文庫本の内容と同じである。注6掲載書、二三五頁、二四七頁参照。

(17) ①②④⑥⑦⑩の諸本は富美文庫本と同じく「きおんしやうしやにむめのみや(祇園精舎に梅の宮)」と記すが、⑨大東急本は「きをんにむめのみや」と記す。⑧天理本は未見である。

(18) ただし、③サントリー本及び⑩逸翁本には「つれてゆかせたまへ」が加わる。⑧天理本は未見である。

(19) 上六六については注6掲載書、二二二頁参照。上七三については、①②④⑥⑦⑨⑩の諸本は⑤藤園堂本と同じく「と、さもこうしやうにのたまへは」と記すが、③サントリー本は「さもかうしやうに、かりたまへは」と記す。⑧天理本は未見である。下五四については、⑥岩瀬文庫本は⑤藤園堂本とは本文であるが、①②③④⑦⑨⑩の諸本では五国の順序が異なる。しかし、いずれにおいても五国は揃っているので、播磨と出雲を書き落としているのは富美文庫本だけである。⑧天理本は未見である。

(20) 毛利家本及び③サントリー本は「かたをならふる」であり、①⑩のうち③⑤を除く

諸本は「うへこす人も」である。注6掲載書、二二〇頁参照。

(21) 注6掲載書、二七〇―二七一頁。

(22) 一項目中に複数の場面があるものについては、便宜上、枝番号を付した。

(23) 田中文雅氏作成の一覧表によれば、③サントリー本は6-2を、⑧天理本は6-1を描いている。また、⑤藤園堂本及び⑥岩瀬文庫本は、6-1及び6-2を別々の画面に描いている。注6掲載書、二七〇頁。

(24) 注6掲載書、二八七頁。

(25) 注6掲載書、二九四頁。

(26) 注6掲載書、二八五頁。

(27) 注6掲載書、二九四頁。

〔付記〕

本稿は平成十九―二十年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究―新出コレクションの調査を中心に―」による研究成果の一部である。本稿をなすにあたり、富美文庫本所蔵者、国立国会図書館、国文学研究資料館、松坂屋上野店の御高配を賜った。掲載した写真は、平成十九年度に元興寺文化財研究所に依頼して撮影したものである。また本文の翻刻にあたっては、高矢真澄さん(平成十九年度本学文化財学科四回生)の協力を得た。記して深謝する。

富美文庫藏「ふしみときは」翻刻

【凡例】

- ・改行、濁点、振り仮名は原文のままとし、句読点及び科白の鉤括弧は適宜補った。
- ・丸括弧を付した文字は、それがミセケチになつてゐることを示す。

・行末の（一オ）は一丁表の略であり、その行からその頁が始まることを示す。以下同。

・藤園堂蔵「伏見ときは」と校合した。異同のある箇所に傍線を引いて番号を付し、各段ごとに末尾に異同内容を示した。

「ナシ」は傍線部の字句がないことを示し、「※」はそこに字句が挿入されることを示す。ただし、漢字と仮名の異同は無視した。なお藤園堂本の本文は、注6掲載書の翻刻を用いた。

・富美文庫本の挿図は「絵1（〜14）」と表記した。藤園堂本の挿図は「絵①（〜16）」と表記し、その挿入箇所に書き入れた。

「ふしみときは 上」

【第一段】

そもく、かのときはのせん（一オ）

そをたつぬるに、ち、はむめ
つのけんさへもん、は、は
かつらのさいしやうとて、
ゐんにつかへたてまつる。
一とせ、天下に女くらへの

ありし時、七たうへちよくし
をたて、みめよき女はう
千人そろへ、千人か中よ
りも百人すくり、百人か
なかよりも十人すくり、十
人か中よりも三人えら

ひいたさるゝ。一人はあやめ
のまい、一人はまこものまい、（一ウ）
いま一人はとつこのまいとそ
申ける。かのあやめ、まこも
と申は、みめうつくしく、け
しやう※、つねにいしやうを
めしかゆる。とつこのまいと

申は、た、いつものまゝにて、
さらにけしやうもなけれ
とも、いろさへまさる人なり
とて、とつこのまいをひき
かへて、ときはのまいとそ
めされける。そのころ、よし
ともは、てんかのしゆこにて

うへみぬわしとおはします。（二オ）
ある時、よしとも、さんたい
あり。「あはれ、ときはをたまは
らて」と、折くそせう申
されたり。みかともちひ
まします。またあるとき、
さんたいありし、しんでん
のし、くちにて、へんけの
物をきりとむる。みかと、あ
いらんましくて「くはんも
つかさも何ならず。さらは
ときはをとらせよ」とて、かた
しけなくも、みかと、ときはの
まいの御たもとに御てを（二ウ）
かけさせ給ひ、
たんつ
いし、あまおちの
きは
にて
たま
はり
けり。

1 はれ 2 ナシ 3 ならみ 4 ひ 5 ひ
6 して 7 ひ 8 は 9 ひ 10 ひ 11 とま

りやく元年正月十七日の

【第二段】
その※ときは、十七さい、よし（三ウ）
ともは三十一、かりそめふりに
なれそめて、いま三人のこ
をまうけ、かゝるうきめを
見るそかし。あらいたはしや、
ときは御せん、いまわか、を
とわがさきにたて、二さい
のうしわかをは御ふところに
をし入、とうのうらなしし
はいて、五てうあたりのく
ろつちを、はしめてふむそ
あはれなる。
1 ころ 2 ナシ 3 り

【第三段】
比はいつそのころかとよ、あゐ（四ウ）
りやく元年正月十七日の

【絵1】〔絵①〕（3オ）

【絵2】〔絵②〕（4オ）

【第三段】
比はいつそのころかとよ、あゐ（四ウ）
りやく元年正月十七日の

【第三段】

りやく元年正月十七日の

事なるに、きよみつまいりと申て、しよにんかすをしらさりし。上下のたうしやにうちまされ、きよみつに

参りつ、〔絵③〕まへのこうしにつや申、十のれんけをもみあはせ、「そもく御山はたむらまるの御こんりう、たい

とう二ねんにたてはしめ、山よりたきかおちければ、みなかみきよきみてらとて、さてこそ、〔絵④〕かくにもせいすい(5オ)

しとはうたれたり。みつからか十七よりいま、てまいるりしやうには、とくともちゑとも申まし、三人のわかたちのゆく末まもりてたひ給へ。なむ大ひく

はんせをん。」とわにくち、ちやうとうちならし、なみたにむせひ給へは、まことに御本

せんも御なふしうやましましけん。みすもきちやうもさ、めいて、ほうしやもゆるくはかり(5ウ)

な

り。

な

り。

1き 2か 3このてら 4り 5へ 6ナシ 7へ 8ほ 9わ 10お

〔絵3〕(6オ)

【第四段】

さてその、ち※、ときは御せん(6ウ)と、ろきの御はうへうつら

せ給ふ。ひしりなみたをなかし給ひ、「あらいたはしの御ありさまや。よしとも、

此よに御さの御時は、こしよ、くるまよ、のり物と、けにゆ、しくさふらひけるか、

かちはたしなる御ありさま、見るに心もこゝろな

らす。しはらくとも申たく候へとも、六はらちかき所な

れは、いつかたへも一まつ御しのひあれ。」と申。ときは、き(7オ)

こしめされて、「さん候。みつからもやまとの

かたを

心かけ

おちうする

に

さふらふそや。

いとま申て

さらは。」とて。

1に 2さこそ 3ナシ

〔絵4〕(7ウ)

【第五段】

と、ろきの御はうをいてさ(8オ)せ給ひ、まよはせたまひけるほどに、かたきのやかたの

にしみかどにまよひそゆかせ給ひける。ときは、この

よし御らんして、「こゝは、かたきのやかたちかき所、こなた

へこよや、わかたち。」と三人のわかのをひき、とをる

所はとこくそ、三十三けん、いまくまの、一二のはし〔絵⑤〕ほ

うしやうし。

1ナシ

〔絵5〕(8ウ)

【第六段】

あくれば正月、けふははや(9オ)十八日の事なるに、うちは春さめふりけれど、こはた

の山はゆきそふる。いつきみかたまさかに、ふるしらゆきを御てにてう

ちはらひく、あしにまかせて、ときはこそ、まよはせ給ひけるとかや。あらいたはし

や、わかきみたち、御こゑあけさせ給ひ、「何とておみ

たいにかいしやくにんはまいらぬそ。さて、また我く

にもおちやめのはそはさ(9ウ)るらん。さふやなふ、おみたい。※

とおとろかもとにたおれふし、りうていこかれ給ひ

けり。ときは、此よし御らんして、「ふかくなり。わかともよ、

なんちらはまさしくけんしの大しやうたるへき身か、

かくふかくに見ゆる。明日になるならば、六はらかたへい

けとられ、いまわかはをとなししとて、六はらかはらにて

きるへし。つき、をとわかをさしころし、うしわかいまた(10オ)

にやくなれば、は、もろ

ともにいけとられ、かも川かつらかはへしつめられん

するその時は、さむいとも、

やはかいふ。つめたいとも、よ

もいはし。た、いとおしき
ものとは、うしわかにて

候そや。きたくはこよや」と

のたま※ひて、そこを見す

て、おち給ふ。わかたちは

御らんして、「なふ、なさけな

や、おみたい、さむいとも

申まひ。」といひ、たもとにす (10ウ)

かりつき、こはたのやまに

か、らる、。(やまに) いたはし

とも〔絵⑥〕中く申はかりは

なかりけり。そうして山

のならひにて、たにふかけ

れはみねたかし、やうく

みねにおあかりあり。「山

人はなさか」ととひ給へは、

たに、山人こたへけり。又

たに、おくたりあり。「山人は

なさか」ととひ給へは、み

ねにこたまそひ、き

ける。たによみねよとした (11オ)

まへは、こはたの山に日は

くる、※、あはれ也ける事ども

なり。あらいたはしや、とき

はこせ、とあるまつのかげ

にたちよらせ給ひ※

いと

はれ

しに。

1は 2わ 3はねは 4わ 5我 6つ

めたや、おみたい 7ナシ 8お 9ナシ

10わ 11ま 12し、つたちはめたい共申ま

し 13わ 14ナシ 15そ□□し 16わ 17

そ 18ナシ 19ける 20か

〔絵6〕(11ウ)

【第七段】

むかひのたを見給へは、(12オ)

ともし火ほのくくと見ゆ

る。「人すむ所なればこそ

ひはみえてあるらん」と、はる

くくたつて見給へは、しつ

かふせやそありける。とほ

そをほとくた、き、「我は

みやこのものなるか、此ゆ

きみちにふみまよひ、

これまできたつて候。一

夜のやとをかし給※へ」※は、内

よりもあるしのはか

たちいて、※、とをほそめに

あけ、ときはの (12ウ)

御すかたを

つくくと

まほり、

1い 2ひ候 3と、さもかうしやうにの

たまへは 4、 5ナシ

〔絵7〕(13オ)

何とせひをはいはすして、(13ウ)

いそきたちかへり、おうち

にむかひてかたりけるは、

「なふ、いかに。おうち、かどの

ほとりに女のごゑとして、

「やとかせ」と申ほとに、立

いて、見候へは、あたり※もか、

やくほとの上らうのおさ

あひ人をあまたつれ、〔絵⑦〕「やと

かせ」と申か、つねの人にては

なけなそ。此山にすむな

るこらうやかんの物かきて、

おうちやうはをしきもつ

にせんとてきたりつるか。それ (14オ)

さなき物ならば、ゆきおひ

た、しくふりつみたれば、

もしゆきをんなと申物か、

おそろしや」とかたる。おうち、

これをき、「あらくすい

したり。しゆしやうとしや

うくはうとくらゐあらそひ

給ひし御時、六てうのはう

くはんだめよし、しやうくはう

かたの御みかたをつかまつ

り、すてにかせんにうちま

け、てんたいさんくはちりん

の御はうに、ふかくしのひて (14ウ)

ましますを、かんせんの御

こよしとも、うつてをたま

はりて、天たいさんよりさ

かしいたし、七条しゆしやか

こんけんたうおかと、申所

にて、たちまち御くひを

うち申。そのんくはむく

ひて、たいけんもんの夜

いくさにかかけぬるは、

たうり也。さるによつて六

はらより、よしともかたの

おちうとをば、「いはをもほり、

たいない〔絵⑧〕までもさかせ」といふ

(15オ)

事なれば、もしもよしとも

かたのおちうとにてやある

らんに、かりそめにやとを

まいらせて、おうちは何と

なるへきそや。あそこの女

はうにやとかさすは、こん

や一夜のうらみたるへし。うらみはすゑもとをるまし。

こなたへこよや、うはこせ。」

としはのあみとをはた

とたて、こはたのさとの

くせかとよ、みなくちなし

とてをともせず。あらいたは(15ウ)

しや、ときはこせ、さきへと

ゆけは、みち見えず、あとへ

もとれは山ちなり。あたりに

いゑともあらはこそ、かなたこ

なたとかりもせめ、せうかや

かけにたちよらせ給ひ、あ

たりなるゆきをうちほらい、

御こそてをぬきてさつと

しき、わかたちをすへなら

へ、人のおやのこをおもふ

みちほとにあはれなる事

よもあらし。つほめかさを

そはたて、風ふくかたの(絵⑨)(16オ)

かきとして、かんふうをふせき

給ひけり。あらいたはしや、

ときはこせ、しよほううあ

てんへんのことほりをお

ほしめしつらねては、「いかに

わかとも物をきけ。それ

ほつけいでうのくりきは

たつとしとありかたし。一

のまきのはうへんほんに

『十はうぶつどちう、ゆいう

てうほう、む二やくむ三、

しよふつはうへんせつ。こ

のもんのは、十はうふつ(16ウ)

とのうちに、た、てうのみ

ありて、二ともなく、三つとも

なし。されは、めうとかける心

は、へんにはをんな、つくり

はおさなひとかける。此こ

とはりをあんするに、※わか共

とみつからは、ほつけのこに

あらずや。さあらんときに

をひては、十はうの神ほと

けもなとか※あはれみなかる

へし。あさましのうき世や。

なむあみたふつ※と十へん

となへ給ひつ、(17オ)

又わかたちに

うちか、り、

りうてい

こかれ

給ひ

けり。

1わ 2て 3ほとり 4ふ 5ナシ 6

わ 7ナシ 8わ 9つ 10い 11わ

わ 13わ 14ひ 15ナシ 16へ 17わ 18

へ 19いち 20お 21い 22ナシ 23せ

24せ 25せ 26ナシ 27お 28い 29り

30た、 31お 32ナシ 33は 34き 35み

たふつ

「絵8」(17ウ)

【第九段】

さる程に、おうち、ねんふつ(18オ)

のこゑにおとろき、「や、い

かに。うはよ、かとのほとり

にねんふつのこゑのきこ

ゆる。よひにやとかり

給ひたる上らうにてはま

しまさぬか。たとへはこら

うやかんの物なりとも、は

かなきをんなとへんする

うへ、なにほとこの事のある

へきそ。たかきもいやしきも

おんなは一つ心にてはなき

か、おそろしや。」うはとかたる。

うは此よしをきくよりも、(18ウ)

「たにのこほくはたかしと

いへとも、みねのこまつに

かけさ、す。三せうの女は

ちゑかしこしと申せとも、

一人のおつとのめいをそむ

かす。よひにかたくせんけん

し給ひし、そのことのはの

おそろしさに、さてこそこ

なたへとは申さね。おうち心

えゆきてましまさは、うは

もいやにてはあるましや。い

さくしやうし申さん。」とて、ふう

ふたちいて、かとをひらき(19オ)

見てあれは、「よひの上らう

にて、※ましまさぬか。御身

一人にもかきらす、おさなき

人をあまたつれ、いつくより

いつかたへのおとをりそ」と

申せは、ときはきこしめして、

うちうらみたるこはねに

て、「されはこそとよ、山人よ。

風にはもろきつゆの身の、

きえざる人のいのちとて、

またこれにさふらふなり」

おうちやうはかうけたまは

り、「あらいたはしや。こなたへ(19ウ)

御いり候へ」とて、いまわか殿を

はおうちかいたき、をとわか

とのはうはかいたき※て、

いゑへしやうしたてまつり、

あた、め申に

つけて(絵⑩)

すその

つら、も

とけに
けり。

1ふ 2ナシ 3お 4ナシ 5へ 6せ
ひ(ふ)ん 7を 8へ 9ナシ 10ふ
11は 12お 13され 14お 15き 16へ
17る

「ふしみときは下」

【第一段】

さるほとに、おうち、ときはの(1オ)

御すかたをつくく^くとまほり、

「よひのうはか、こらうやかん

との給ひしか、またおう

ちかすいに、よしともかたの

おちうとにてや有らん。

あまりふしんにせんすれば、

一しゆのうたをかけ、御心の

うちをしり給ひ候へ。」うは、

此よしをきくよりも、「それ、

わかさかり、みやこにありし

ときこそ、月見花見なん

と、申、連かをもたしなみ

候へ。この廿六年かあひたは(1ウ)

ふしみの里にすてられて、

哥をも連かをもしらぬ也。

おうち、むかしをわすれ給はず

は、一しゆの哥をかけ、御心の

うちをしり給へ」※おうち、な
のめならずよろこひて、

あひのしやうしをほとく^くと

をとつれ、一しゆのうたを

そゑいしける。

こはた山おろすあらしの

はけしくてやとり

かねたる夜はの月かな

1らい 2ナシ 3は 4お 5わ

〔絵9〕〔絵11〕(2オ)

【第二段】

ときは、きこしめされて「あら(2ウ)

やさしや、こはいかに。すかたこそ

山のかせきになりにたりとも、

心は花のみやこなり。こし

をれなからかへりうたを

せはや」とおほしめし、とうの

まくらほとく^くとをとつれ、

こはた山すそ野の

あらしはけしくて

ふしみといへど

ねられ

さりけり

かやうにゑいし給ひければ、(3オ)

おうちやうはかうけたまほり、

「さてはうたかふ所もなし。よし
ともかたのおちうとなり。

では人めしけ、れは、こなた

へしやうし申せ」とて、ちふつ

たうをこしらへ、ときはをしや

うしたてまつり、哥をよみ、

しをつくり、「けふ、またゆき

ふかし。けふはさむう候。そら

はれは、上らうのおほしめさん

所まで、おうちやうはか御

ともせん」と「けふもく」とと、

むれは、あるしのなさげに(3ウ)

ほたされ※、ふしみのさとに、

ときは御せん、あらたまの

月をこし

きさらきに

なるまで

おはし

ます。

1る 2お 3お 4わ 5は 6て

〔絵10〕〔絵12〕(4オ)

【第三段】

此あたりに、人にめしつかはる、(4ウ)

しもをんなとも、一とこほに

あつまり、「まことや、うけたま

はれは、むかひのたにのおう
ちの所にこそ、みめいつく

しき上らうの、正月中、

御さあるよしをうけたまはれ

は、われもく^くと、しうにいと

まをこひ、上らうをおかみに

まいらん」といふ。「もつともし

かるへし」とて、いつもの事な

れは、てかくるこおけにぢ

よくしゆをつき、おうちか

ていへさ、とか、る。おうち此(5オ)

よし見るよりも、「あらやさし

のわこせたちや、上らうおか

みにきたりたるか、こなたへ

きたり候へ」とて、ちふつた

うへしやうする。五人の女はう

とも、さげの入たるおけを一

所にすへならへ、ときはの御

すかたを見たてまつるは、道

理なり。ときは、此よし御らん

して、「あらおそろしや。あの

やうに人にめしつかはる、し

もをんなの、ことにくちの

さたうなるに、いつはりをかた(5ウ)

つてき〔絵13〕かせはや」とおほしめし、

「うれしやな、わこせたちは

みつからをなくさめんため

にきたりたるがうれしきに、

みつからがこきやうをかたつ

てきかすへし。わらはかこ

きやうはやまとのくに、ふるさ

とはうだのこほり、かた山里

のものなり。わらはか十七八

のころ、おやにしかられまい

らせて、都へ上り、三てうむ

らまちにやとをとりてあり

しに、五てうむろまぢより、(6オ)

はしめてつまをまうくる。

京人のやさしさはちやか

うにすいてれんかして

ふえおもしろくふきな

らし、しちくふんしやの

御らんし候へは

わすれ

かたみ

を

まうけて

さふらふ

なり。

1 お 2 い 3 り 4 ナシ 5 ナシ 6 さ

つと 7 ナシ 8 わ 9 ナシ 10 わ 11 わ

12 も 13 つ 14 も 15 ら 16 ひ 17 ゑ 18

ナシ 19 ナシ

〔絵11〕(6ウ)

【第四段】

又一条むらさきの、あたりに、(7オ)

はしめてつまをかたらひ、三

とせかよふと申せとも、みつ

からさらにねたます。これ

はふるきことのはをおもひ

いたす。おつとはやまどの

くに、ならひかうちのたか

やすに、はしめてつまをかた

らひ、三とせかよふと申せ

とも、あとにのこれるふるき

つま、ねたむ心はなかりけり。

おつと、かへりておもふやう、

『我ならず、よそこに心かあれば

こそ、われをはねたまさり(7ウ)

ける』とかへりて、つまをそね

たみける。ある時、此おつと、

たちはき、やおひ(て)、ゆみ

もつて、『われはかうちへこ

し候そ。やかてかへらん。さらは』

とて、かうちへはこさすして、

みなみおもての花そのに

たちしのひ、をんなのてい

をみてあれば、あらむさん

や、此をんな、ちふつたうに

まいり、ふつてんにむかひ、

かうをもち、はなをつみ、夜す

から、ことをひきそはめ、(8オ)

うらみないてそあたりける。

やはんはかりに、此をんな、〔絵14〕

しろきひさげに水を

入、むねのあひたにをき

ければ、かならずゆにそ

なりにける。入ては水を入、

夜すから、むねをそ

ひやし

ける。

1 人に 2 わ 3 つ 4 ナシ 5 わ 6 わ

7 お 8 せ 9 い 10 り 11 お 12 ナシ

13 り

〔絵12〕(8ウ)

【第五段】

これは三とせかそのあひた、(9オ)

ねたしとおもふ心にや、色

にはいたさ、りけるか、ほむら

となりてにゑにけり。すて

にあかつき※、さよふけかたに

なりしかは、くるしげなる

いきをつき、『これへかうち

のたかやすへは、たつたこ

ゑと申てあくしよのある

ときく物を、いつの日の

なん時か、此山にて我つま

のしせんする事のかなし

さよ』とおもひつらねて

此女、一しゆのうたをそ(9ウ)

ゑいしける。

風ふけはおきつ

しらなみ

たつた山

夜はにや

君か

ひとりこゆらん

とかやうにゑいしたりければ、

おつと、此よしきくよりも、

『けんじん、じくんにつかへす。

ていちよ、りやうふにまみえ

すと今こそ思るしられ

たれ。すかたか、りのまさる

女はありとても、心のやさしき(10オ)

ねうはうのありつへしとも

おほえす』とかうちかよひ

を思ひきり、ふるきつま

にそちきらるゝ。それを

たそとたつぬるに、さいこ

中将也とかや、かゝる事を

おもひ出し、みつからさらに

ねたまぬを、あたりのとも

たちかあつまりて、『おかた

はしろしめさぬか。一てうの

上らうを此屋のうちに入、

御身をはやまどのうたへ
をくろうと申て、御身にそ(10ウ)
はんもいくほにてしてへ
きそ」とたもとにすかり、な
くほとに、ねたまし物を
と思へとも、そのときみつか
らはらかたつて、あさまし
のちきりやな。天にあらは
ひよくの鳥、ちにあらは
連りの枝、かみならはむ※
すふのかみ、ほとけならは
あいせんわう、こたうりんゑ
のあなたなる、しやか大ひ
のゆんてにさふらふねはん
のきはかわるとも、われら(11オ)
かいてもせはかはらしと、ふかくた
のみをなしつるに、おつとの
心と川のせは、一夜にかはる
とつたへしを、今こそおもひ
しられけり。たとへは、みつから
こそ、えんつきはて、候とも、
三人のわかともをさきにた
ていつるならば、こともにめか
くれて、よひかへさぬ事は
よもあらしとさきにたて、
出て候へと※、なさけもしらぬ
おつとにて、二たひよひも
かへさす。一といてたるおつ(11ウ)

とのもとへかへらん事のはつ
かしさに、おやをたのふて
やまどのうたへかへらふす
るか、めんほくなさはかきり
なし。わこせたちもわかけれ
は、せうくねたき事ありとも、
おつとのかとをそこつに出
てこうくわひすな」とのたま
ひて、あまりのあさましさに、
しのひのなみたせきあへす。
おうちやうはかうけたまはり、
「た、いまこそ、上らうさまの
御ゆくゑをくはしくそんして(12オ)
候へ。なにとて、わこせたちは
うたを※うたひ、まひをもまひ、
上らうなくさめて給はらぬぞ。」
女はうとも、うけたまはり、「わらは
と申は、ねにふし、とらにおき、
きりをひかしにか、やき、ちやう
やのねふりはやさまし、やも
めからすのうかれこゑ、かうと
いひてつけわたる。とりもろ
ともにねやをいて、あさゆふの
せいろをいとなみ、おしうの
おほせにもれしと、これをたし
なみ候へは、うたをもまいをも(12ウ)
しらぬなり。さりながら、さ月に
なれはたへおりて、たうとおと

こにはやされて、たうたといふ
物をひとつつ、おほえて候。
それなりとも申さうか。」おうち、
これをき、「おもしろしく、
こしをたうりんのやにはなし、
たかをくわさんのやうにかへす、
かもさむうして水へ入、には鳥
さむくして木へのほる。しよ
ほうしつさうときく時は、
みねのあらしものりのこゑ。
それをなりともひとつつ、(13オ)
申せく」とはやしけり。五人
のねうはうとも、ひとつつに
のものにて、おなしたうたを
一とにうたひ申へきかと思
へは、思ひのほかにはさなく
て、五くにの物にてあり。一人は
たんこ、※、一人はいつみ、一人はかい
たうのすゑとをたうみの
國のものなり。「わこせ、うた
へ」「や、そなたから、うたひはし
めてこそ。此はうにもうたふ
へけれ」と「うたへ※」「人うたへや」
「我うたへ」とはつたひしとあら(13ウ)
そふ。そのうちにても、いつも
のくにの女はう、すこし年
おとなしかりける、「もんたうは
むやくなり。いてく、みつから

うたひはしめて、それ、つきく
をうたはせん。」※いふよりはやく
つんとたちて、時ならぬたうた
をはつたとあけてうたふた
り。「たうへよや、さうとめ、さ月
ののふをはやむるは、かんなう
のことりほと、きす、やまから、
こから、四十から、此鳥たにも
さはたれば、ときのふはさかん(14オ)
なり。」一せいしとろもとろに
うたひなし、まいを二てんま
いすまし、一せいをそつたり
ける。「めてたや、ありかたや、てん
せうたいしん、くまの、こんけん、
かしま、かんどり、すは、あつた、すみ
よし、かものけしやう、きおん
しやうしやにむめのみや、八まん
大ほさつ、(絵15) たかまかはらに神
そまします、神のち、かみの
は、いさなきいさなみのみ
こと、わらはかこきやうはいつ
もの國のものなり、されは(14ウ)
神の御ためそふまん所も
ち給ふ、此たひあゆみを
はこふともから、たれかはり
しやうをうけさらん、このりし
やうをうけとつて、たれに
かなまいらせん、あらまこと

わすれたり、まことにわす
れたり、た、いまのみ(御)さしき
の上らうさまにまいらせん。
あらめてたや」とうたふた

り。そのつきにうたふたは、は
りまのくにのもの也。つと
いて、うたふたり。「はりま(15才)

なるたかさこやく、おのへ
のまつはたか、らて、したに
すむは何やらん、とひといは
みとさつとうけとつて、た
れにかなまいらせん、あら
まことわすれたり、た、い
まのみさしきのおさあ
ひさまにまいらせん

あら
めて

たや」と
うたふたり。

1へかへる 2の 3より 4わ 5へ
6ナシ 7ひ 8ひ 9へ 10ひ 11けり
12わ 13ナシ 14お 15ら 16あ 17む
18ひ 19う 20は 21ナシ 22あ 23も
24う 25き 26ふ 27わ 28も 29い 30
ふ 31ゆ 32へ 33ひ 34ひ 35え 36く
37う 38る 39わ 40ナシ 41く 42一
人ははりま、ひとりはいつも 43う 44は

45候へ 46ナシ 47り 48の 49と 50あ
51わ 52ひ 53り 54ナシ 55はらわ 56
ナシ 57ナシ 58さ 59わひ

〔絵13〕(15ウ)

【第六段】

そのつきにうたふたは、たん(16才)
このくにのもの也。かうこそ
はうたふたり。「たんこのくに、
久しき人をたつぬるに、
うらしまのみやうしん、七百
さいをたまち給ふ。あまの
はしたて、くせのとのもん
しゆ、ちゑとさいかくをさつ
とうけとつて、たれにかな
まいらせん、あらまことわ
すれたり、た、いまのみさ
しきの、いくはるく、のわか
きみへさつとゆつり申さん。
あらめてたや」とうたふたり。(16ウ)

そのつきにうたふたは、いつみ
のくにの女はう、としを申せ
は十八さいにまかりなるか、
かほ※にもみちをちらし、うた
ひかねつ、うちうつむい
てゐたりけり。うたふたる
をんなとも、「やあ、わらはとも

にうたはせて、うちうつむい
てゐたるそや、うたへやくく
といふま、に、たもとをとつ
てひつたつる。「それまでも
さふらはす。うたはん」といふ
ま、に、ゐたるさしきを、つんと(17才)

たちて、ひしやくとつて、
うちかたけ、さしきを二三
とまはりさふらひ、はつた
とあけてうたふた。「めてた
やな。わらはかこきやう、いつみ
のくにのもの也。そのなをよ
そへて、いつみかわひてさふら
ふ」のこりの女とも、ひやうしを
うちそろへ、「やあ、わこせは
そこつなる事な申そ。いつ
くのほとにわひたるそ。」「愛※
ほとにわひてさう。上らう
さまざまもなかへのひしや(17ウ)
く、かねのてうしにてくむ
ともとるともよもつきし。か、る
めてたきいつみをは、たれに
かな、まいらせん。あらまこと
わすれたり。た、いまのみ
さしきへさつとゆつり申さん。
あらめてたや」とうたふたり。
そのつきにうたふたは、とを
たうみのくにの、はまなの

はしのつめなところのもの
なれば、いかにもおもしろく
うたはんすらんと心をすま
す所に、さはまたなくて此(18才)
をんな、しもおちさして
はしりいる。〔絵14〕うたふたるをん
なとも、ひやうしをそろへ「や、は
こせく、わらはにうたをう
たはせて、いつくをさして
にくるそや。いてよく」と
せめければ、さはまたなくて
此女たもとよりたすきとり
て、さつとかけ、ふるびたる
かさのところくやふれ
たるをきつとひきそは
め、はつたとあけてうたふた、
「とをたうみなるくはまな(18ウ)
のはしのしたにすむは、何
やらん、こいかふなか、はへの
こか、いかにをのれかり、う
めくとも、しやくすいうちあ
けて、た、いまの
みさし
きの、

1え 2な 3ふ 4も 5ナシ 6と
7い 8わ 9い 10ナシ 11き 12い
13つ 14に 15う 16の 17は 18う 19

ナシ 20 さ 21 ん 22 う 23 ひ 24 ナシ
25 ナシ 26 ひ 27 ま

〔絵14〕(19オ)

【第七段】

おさかなにまいらせん。あら(19ウ)
めてたや」と申て、きよくに
か、つてくるひけり。

さしき

うちの

人々一とに

とつとこゑをあけ、

おとるはかりに

まひおさめ

さしきに

きつと

なをりけり。

1り 2い



図2 下冊 表紙

図1 上冊 表紙

図4 上冊 1丁表（本文冒頭）

図3 上冊 表紙見返し

図6 上冊 裏表紙見返し

図5 上冊 19丁裏（本文末尾）

図8 下冊 裏表紙見返し

図7 下冊 表紙見返し

図9 絵1 (上册3丁表)

図11 絵3 (上册6丁表)

図10 絵2 (上册4丁表)

図13 絵5 (上册8丁裏)

図12 絵4 (上册7丁裏)

图 14 繪 6 (上册 11 丁裏)

图 16 繪 8 (上册 17 丁裏)

图 15 繪 7 (上册 12 丁裏)

图 18 繪 10 (下册表 4 丁表)

图 17 繪 9 (下册 2 丁表)

図 20 絵 12 (下冊 8 丁裏)

図 19 絵 11 (下冊 6 丁裏)

図 22 絵 14 (下冊 19 丁表)

図 21 絵 13 (下冊 15 丁裏)

図 24 絵 2 (部分)

図 23 下冊 裏表紙 (部分) 亀甲文と鱗の文様

図 26 絵 12 (部分)

図 25 絵 8 (部分)